

施設と保育

原田 春子

幼稚園の施設、設備が保育の上に大きな役割をもっていることは今更いまでもない。広い敷地、採光、風通はもとより幼児の動きまで研究して設計された園舎、教育的健康的に考慮されたかきかきだけの設備や遊具などは、私ども保育の仕事にたずさわる者の、常に望み、夢見ているものであるが、現実には必ずしもこのような理想的施設にめぐまれた幼稚園ばかりとはいわれない状況のように思われる。

私の勤務しているところも、こうした理想郷からは程遠いささやかな私立幼稚園である。園の位置は、新宿の繁華街から数丁距たつたところ、表通りから少しばかり引込んではいるが、街の騒音はここにも絶えず流れ込んで、何んとはなしに人の心を落着かなくさせる。土一升、金なにがしかの土地ゆえ、園をめぐる家々が、境界線すれすれにまで建て込んで、二百坪ばかりの敷地はいよいよせこましく感じられる。このような社会環境の中であって、一応、幼稚園としての設備を整えて設置されているとはいうものの、文部省の示す設置基準には、はるかに及ばず、教育上ほしい設備のあれこれもなかなか思うにまかせぬ現状である。

幼児の教育は、かれらをつつむあらゆるものが一体となって働きかけ、望ましい人間像へと近づけさせるのであるから、現場にある者が、よりよい施設、設備を望むのは当然のことであろう。しか

し、そうした要求も園それぞれの事情によって、そうたやすくいれられるものでもなく、また敷地拡張などのように望んでもほとんど不可能な場合も多く、こうした面での不備不足は教師の責任のほかであるとはいえ、園児たちに対して、何かすまない思いで心が暗くなるのである。

けれども、園児たちにとって、ここは最良の生活の場でなければならぬ。ここで過す一年、あるいは二年の期間は、かれらの生涯の最も重要な時期である。また私どもを信頼し、すべてを任せて、大切な愛児を託しておられる両親の期待は大きい。それらを思えば、その時々の実情はいかんともあれ、その中で最大の教育効果を上げることが、私ども教師の負うべき任務であり、またそこに仕事の張り合いを見出すことのできるのである。

当園の園児たちの半数以上は商店かアパートに住んでいる。一日中他人に接触することの多い生活であるから、人馴れして物怖じせず、勤めがするどくて、動作も機敏であるが、じつくりと落着いて、物事に集中することができにくい。社会から受ける強い刺激になれていて、生活力が旺盛であり、競争心がつよくて人を押のけて先を争う利己的などころも多く見られる。

入園当初はちよつと身体が触れ合っても「何を？」と言うように身構えたりけんかになったりで、交友関係に何かとげとげしたものを感じられるので、何よりも友だちと善意の交わりがもてるように、ひとりひとりのもつ心の美しくさ、やさしさなどを強調して示し、親愛感を深めるように努力している。両親方にも、つまらぬ競争心を起したり、子どものけんかに本気になって怒ったり、友だちの悪評を子どもの前で口にしたりせぬように、など、折ある毎に注

意をあたえている。

保育室の面積、園庭の広さ、遊具の数などは入園当初子どもたちの気持の不安定な時期にはことに大きく影響して、保育をやりよくもやりにくくもするものであるが、何もかもが十分とは行かない環境で子どもたちが満足して遊び、思う存分活動することができるよう、園庭の使い方や遊具のあてがい方に教師はいろいろと工夫をする。当園は百名以内の小規模な園であるから、三つのクラスが、孤立したクラス意識をもたず、一族のような親しみをもっている。子どもたちも年少児年長児が入り交って遊ぶことも多く、面積のせまい割には気分的に圧迫されることが少ない。それでもブランコなどはとく古参者に占領され勝ちなので、各クラスの所屬をきめておき、あいている時はどれに乗ってもよいということにしている。かけっこや野球のように場所を広くほしい時には、他のクラスが室内にいる時を見て庭を使うなど、カリキュラムにこだわらず、子どもたちの状態に応じて適当に誘導している。

このようにして、あり余るエネルギーを十分に発散させる一方、自制心を養い、少ないものでもゆずり合ったり分け合ったりして、集団の生活を快適にすることができるよう生活指導の面ではまた一層根気と努力を要する。

物の分け合いばかりでなく、小さい人を親切にいたわり、弱者優先にする心がけを、年長児にはとくによく教え、大きい者としての度量をもってことに当らせる。年少児には、いつも大きい者にかばって貰うことばかりを当然と思わぬように、一定のきまりを守って行動し、けんかなどもできるだけ自分たちで批判し処理するように仕向けている。

子どもたちが非常に好んで、力いっぱい取り組む仕事に木工がある。鋸、金鋸、くぎ抜など一揃をクラス毎に備えておき、教師の監督のもとに、いつでも出して使えるようにしてある。材料の木片は、建築の切りくずで、小ささまさまの形であるが、沢山集めて貯えておき、箱いっぱい手近なところに用意しておく。鋸ひきは人の邪魔にならぬ場所を選び、他の道具もけがの危険がないように注意して扱わせている。力の強い子どもはそうとう厚い木の板でも見る間に切りこなして好みの形を作り幾つかの木片を打ちつけて船や汽車や自動車などを作り上げる。船を作る時には、中途で何回も水に浮かせて、重さを平均させるなど、それぞれの能力に応じて面白い作品ができる。これにエナメルで着色したりして、子どもらにとっては、金銭で買うことのできない貴重な宝となるのである。平常落着きのない子どももこの仕事には相当長時間集中しており、仕上げるまでは他のことに見向きもしないほど熱心である。また平素気持が荒々しく動作が粗野であった子どもが、好んで鋸ひきをよくし、製作に没頭してから、幾分気持が和らぎ落着きがでてきたとの報告もある。

粘土も一斉に製作させることはせず大きな魂のまま用意して、やりたいたいに自由に使わせるので、かなり多くの量を使うことができる。紙や絵具も費用の許す限り豊富にあたえるが、廃物の利用も心がけて、空瓶、空罐、新聞粘土、などは大切な材料にして用いる。不要になった棒ぞうきんの丸い柄を薄く輪ざりにして、小さい自動車や汽車の車に使ったのは大変具合がよく、一本で沢山とれるので

大勢の子どもたちにあてがわれた。

都会の子どもたちは物質の価値判断や損得の常識は発達しているが、天の恵み、大自然のいとなみのすばらしさについては、無関心無神経である。しかし、周囲からの刺戟のあたえようで、大きな興味をもたせることも、鋭い観察の眼を開かせることもできるものである。私どもは心がけて、いろいろな生き物や植物などを子どもたちの身近において親しませるようにしている。お腹の大きいかまきりが、木の枝に卵を産みつけるところ。翌春待ちに待った卵から小虫が生れ出るところなど、子どもたちは真剣な顔付で虫がねをのぞいていた。カラタチの臭い青虫がさなぎになり、十数日を経て美しくしいあげは蝶になった時のおどろき、十種もある無気味な姿の毛虫が黒い丸っこいさなぎになり、白い色の蛾が飛び出すまでを見て、女の子まで毛虫を怖がらずに見られるようになった。保育室の隅の幾つかのガラス器が子どもたちの小博物館で、いつも数人の子どもたちが昆虫図鑑と実物を見比べたりしている。少し頭の進んだ子どもはもっとよい昆虫の参考がほしいと注文してくることもある。猫のひたい程の花壇にも四季折々何かしら花が咲いたり実ったりして、子どもたちを喜ばせている。

チューリップが一本だけ育って真赤な花を咲かせた時のうれしさ、思わず「咲いた咲いたチューリップ」のうたが子どもたちの口からうたい出された。日除柵に這い上らせたへちまとひょうたんのつるが、自分たちの脊丈をぐんぐん追越して伸びるうらやましさを。小さな変化の一つ一つが、大発見の報告となって教師のもとへ飛び込んでくる。園に持ち込んだ小さな「自然」の姿を、もっと広く、

ありのまま見せたり、楽しませたりするため、春秋に、井の頭公園や新宿御苑に園外保育をすることもうれしい行事の一つである。

せまい場所、貧弱な施設の中にあっても、子どもたちの身体をすこやかに伸ばし、その心を美しく豊かに育てるものは、教師の深い愛情であり、誠実さであり、研究欲であり、また子どもとともに驚き、よろこび、感激する心の若さであろうと思う。

他園に誇る立派な設備をもたずとも、送迎バスの豪勢さはなくとも、三々五々手をとり合って涌って来る園児たちを迎えて、ここがかれらのための本当の楽園である。との自信と誇りとをもつて、自分たちの使命を果したいと思う。

*

*

*

*

*

*